

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382

京都市南区吉祥院石原上川原町21

<http://www.create-k.co.jp>

クリエイツかもがわ



TEL 075 (661) 5741

FAX 075 (693) 6605

送料何冊でも240円

子どもの命を 守るために

保育事故裁判から
保育を問い直す



平沼博将・繁松祐行

1200円＋税

ラッコランド京橋園 乳児死亡事故裁判を支援する会 ◆ 編著
無資格の保育担当者2人と17人の子どもの命が「過」す認可
外保育施設で起こった「うつぶせ寝」死亡事故、裁判を通して
明らかにした事実から、本来の「保育」とは何かを考える。

自立と希望を ともにつくる

特別支援学級学校の集団づくり

希望をもって生きる力を
育てようとする、子ども
たちの自立への願いを理
解し、希望を紡ぐ集団づ
くりをどう進めるか、そ
の実践的展望を考える。

湯浅恭正・小室友紀子・大和久勝 ◆ 編著 1800円＋税

障害の重い 子どもの 発達診断

発達検査の手法、発達診断の
視点の検討を通して、何がど
のように見えるのか、何を
落とさず読み取るべきかを議
論しよう。

基本と応用

白石正久 ◆ 著

2400円＋税

第22回社会福祉研究交流集会in 京都

つくるのは私だ！

——いのち・くらし・平和——

オープニング

きっしょういんろくさいねんぶつ
吉祥院六斎念仏

記念講演

「もつとナチスを考える」



講師

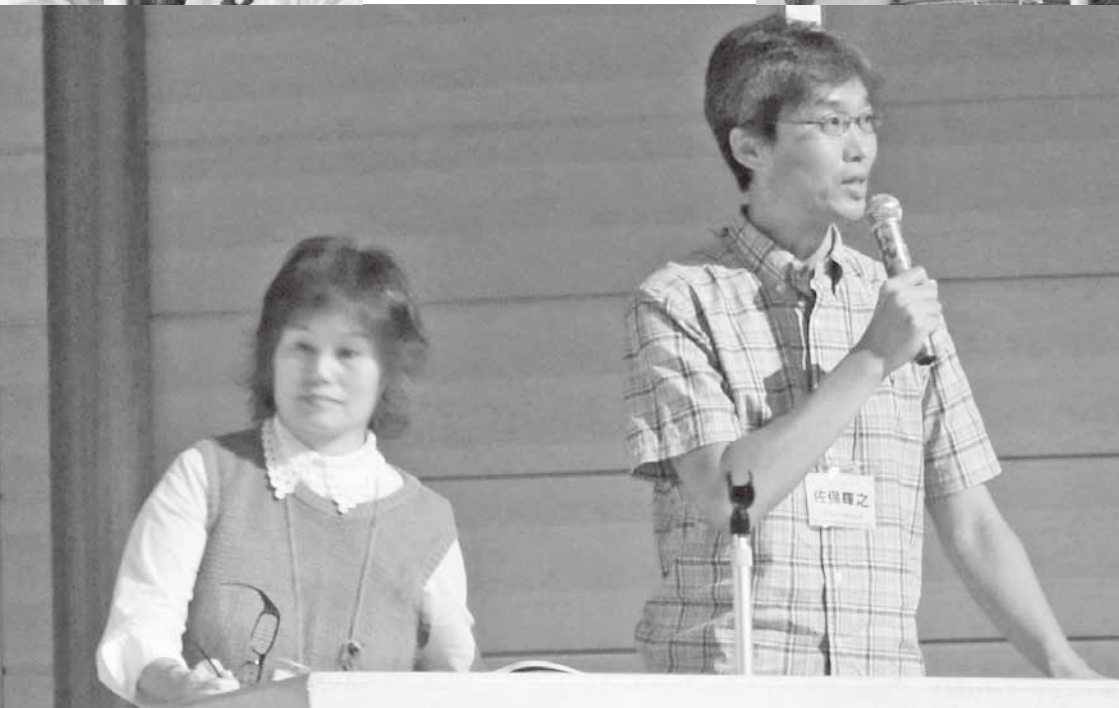
藤原辰史さん

京都大学人文科学研究所准教授



リレートーク

の ま り く もりたひろし たにもとしげやす か
野間陸、森田洋、谷本樹保、加
み ね さ ほてる
味根とも子、永井克己、佐保輝
ゆき
之・ひかる、の各氏。
コーディネーターは、しどうしゅうし
志藤修史
さん。





分科会の番外編・基礎講座が開講されました。かわいかつよし、かきうちくにみつ、からかまなおよし、河合克義、垣内国光、唐鎌直義さんが講師を務められました。



集会は、9月3日・4日、京都の立命館大学衣笠キャンパスで開催されました。京都から、全国から、今年も集いました。来年は、8月26日・27日、東海地域で開催予定です。社会福祉研究交流集会で、また、お会いしましょう！
(写真編集・コメント：下野祇園)

●特集● 「第22回社会福祉研究交流集会」で何が語られたか

社会保障・社会福祉の貧困が

生活のしづらさにいっそう拍車をかける	志藤 修史	10
記念講演「もっとナチスを考える」(藤原辰史)		12
6人のリレートーク		13
分科会報告(第1～第7)		16
ひろばセミナー		30

●トピックス●

福島はいま(1) 今も続く避難指示区域 飯舘村		32
子どもを儲けの対象にするな!		
アベノミクスの保育政策と産業一体化路線		38
早川ゼミ 自分たちの暮らしは自分たちで守る		
——戦後も今も変わらないこと		44
視覚に障害があっても安心できる暮らしを(養護老人問題・第2回)		
——盲養護老人ホームが進めていくべきこと	上杉 徳明	48
月刊化200号(100～199号) あんな特集、こんな特集		52

●連載●

フォーラム

高齢者のための生活施設機能の再構築	河合 克義	56
施設から子どもたちの未来をきりひらく		
子どもたちのゆたかな生活を願って——私たちができること		
	桑原 一章	58
相談室の窓から 相模原事件犯人について	青木 道忠	62
育つ風景 「小学校との接続」の意味	清水 玲子	64
「助けて!」って言ってもええねんで!		
目の前の「一人ひとりを大切にすること」	徳丸ゆき子	66
全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ	千田勝夫・網枝	68
働く自由を求めて(2)		
映画案内 『妻への家路』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて 野宿者との「共生」	生田 武志	72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート		
お年寄りを描くのじゃ!	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け! 男やもめ	川口モトコ	77

●表紙の絵●
神門やす子



みんなのポスト 54 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア● 第22回社会福祉研究交流集会in京都

つくるのは私だ! ——いのち・くらし・平和——

月刊化200号突破によせて

『福祉のひろば』編集人 いしくら 石倉 やすじ 康次

社会福祉の現場に根ざした、本誌『福祉のひろば』が、季刊の雑誌から月刊誌として発行されるようになり、二〇〇号を迎えました。季刊から月刊化し、目まぐるしく変化する福祉情勢にも目くばりしながら、社会福祉とは何なのかをいつも問ひかけ、変化する現実にとのように向き合えばいいのか、何を大切にするのか、誰と手をつなぐのか、これらを共に考える雑誌であろうとやってきました。これからも全国におられる読者のみなさんと、双方向コミュニケーションの場として、もっとこの輪を広げていきたいと思っています。

福祉の分野には、多様な情報誌があります。そんななかで、『福祉のひろば』は、市民・利用者目線を大切にしてきました。そして、分野をこえた総合誌であることも大切にしてきました。貧困が身近にせまり、福祉に働く人の仕事の意義と労働条件のギャップ、公的福祉の抑制と企業参入が分野をこえて広がっています。こんなときこそ総合的な視野から問題をとらえないと、解決の道筋や手がかりが見えないまま行き詰まってしまい、上から提示される、偽りの解決策に乗せられかねません。人々の暮らしを見つめ、社会福祉の基本から問題をとらえようとする、みんなの「ひろば」であり続けたいと希^{ねが}っているのです。

社会福祉問題をしっかりとらえるには、「アリの眼」と、「鳥の眼」と、「見えないものを見る眼」が必要だと私は思います。「アリの眼」とは、地面を這うように歩き、嗅覚をはじめとする五感を働かせ、共感できるくらいにしっかりと現実をとらえるホットな眼のことです。



いしくら やすじ

総合社会福祉研究所理事長・立命館大学産業社会学部教授

「鳥の眼」とは、相手と自分を含む関係や環境を外から眺めるクールな眼です。それには、相手と自分とを客観的にとらえる地図のような見取り図をもつことが必要になります。「見えないうものを見る眼」とは、眼に見え、五感で感じ取れる現実の背後に隠れている、社会の構造的なしくみをとらえる眼です。この眼がないと目の前にあるしんどさを生み出しているものが見えず、真の原因には手つかずのまま、相手を責め立て、遠ざける悪循環におちいる危険をまぬがれません。

福祉の世界の水準をつくるのは、機械的な生産技術や薬品の効能のようなものではなく、執刀医の個人的な技術の水準のようなものでもなく、それはそこに働く人たちの「人間的力量」です。しかも経験年数や経歴も違う人々で集まる集団や組織がもっている力量の水準が鍵です。ですから職員の労働条件が不安定で離職率が高い状態は、福祉労働の水準を崩していくことを意味するものであり、傍観するわけにはいきません。

『福祉のひろば』は、三つの眼を研ぎ澄まし、福祉に関わる人たちの連帯を強めることに貢献できることを願う、コミュニケーション雑誌なのです。この輪を広げ強めるためにこれからもあなたの力を貸して下さい。



特集

社会福祉でいま、問われていることは何か？

第22回社会福祉研究交流集会in京都

月刊化二〇〇号と社会福祉

例年、十一月号は、社会福祉研究交流集会の報告を掲載しています。今回は、九月三・四日、京都の立命館大学衣笠キャンパスで開催された集会の概要をお知らせします。

同時に十一月号は、一九七九年に創刊し、その後、季刊誌として発行を続け、二〇〇〇年四月から月刊化した『福祉のひろば』が、月刊化二〇〇号を迎えるという節目に当たります。

今集会でも、社会福祉のいまと明日を、社会福祉現場で働く幅広い人々、当事者、研究者等が集まって論じ合いました。社会福祉を共有し、共感することと、現実をどのようにとらえるのか、非常に重要な機会だったと多くの感想が寄せられました。内容は、本文をお読み頂き、感想等もお寄せ頂けると幸いです。なお、分科会等に要員としてかわっていただいた学生、院生のみなさんに分科会の概要記録をお願いし、掲載させていただきました。

『福祉のひろば』は、月刊化に伴い、発行元の大阪福祉事業財団から、編集を総合社会福祉研究所に、販売を有限会社福祉のひろばに委託することになりました。社会福祉問題と月刊誌の状況について、ここで少し紹介させていただきます。今後とも『福祉のひろば』の編集や普及に、お力を頂きたくお願いする次第です。

総合社会福祉研究所としてひろばの編集を受け持っている値打ちはどこにあるのか？ この意味は、広く深いものととらえています。社会福祉現場や関係者が読者の大半を占め、全国各地に研究所会員と読者が広がっていること自体が、非常にすごいことです。いまと明日の社会福祉を考え、願い、『福祉のひろば』が、現場の代弁者となっ

て社会福祉の実態や問題、願いを発信するという大きな期待が毎号寄せられます。しかし、せっかく全国に広がる会員や読者の存在が、十分に発揮できているかどうかは常に問われています。これは、課題であり、同時に挑戦だと思っています。

月刊誌を維持することを少し紹介します。経営の内実は、多くの未集金を抱え、事業を廻すために、多額の借金を抱えた出航でした。二〇〇五年に就任したとき、その経営も重要な任務として任された（実はそちらの方が大変だった）のですが、貸借の状態があまりにも悪く、編集とは別に未集金の回収（貸し倒れ処理さえできない多額）と、身の丈（資金）にあった編集や製本の仕組みへの転換が急務でした。そこで、再建三か年計画を組み、一年目で一定の財政再建の目処を見出すことができました。それは、読者との信頼関係の強さです。もちろん、財務分析をしつかりしないと問題解決は見えてきませんが、財政は活動のバロメーターということを事業運営で押さえることでした。そのうえで、未収読者への働きかけと回収できない債権の振り分けを行わなければなりません。ほとんどの読者は、協力的な対応をしていただき、相当な未収金を回収することができました。

もう一点の身の丈問題です。キャッシュフローに見合った編集ですが、きれいごとではできません。この点では、総合社会福祉研究所の研究活動と『福祉のひろば』の編集が文字通り統合する視点に行き着きます。ことばでは、車の両輪のようなたとえがされますが、しっかりとその両輪にさせることでした。表紙、グラビア、連載も見直しを図り、この分野での他誌の積極的な取り組みに学びながら挑戦していきました。書店への流通販売を取りやめた最終的な判断は、月刊誌として流通に出せるだけの販売率が低く、それが『福祉のひろば』財政に大きな影響を与えていたことが要因です。それに代わる仕組みとして、独自のオンラインサイトを開設し、カード決済も行えるようにしたこと。また、電子書籍化にも取り組みました。『福祉のひろば』の読者の多くは、定期購読者ですが、流通の独自開発も大きな役割をもっています。

『福祉のひろば』は、社会福祉現場で働く人たち、当事者家族、なかま、そして、関係研究者等々の参画とご尽力で成り立っています。あらためて感謝申し上げます。

（編集主幹）